

接吻

江戸川乱歩

青空文庫

近頃は有頂天うちようてんの山名宗三やまなそうぞうであつた。何とも云えぬ暖かい、柔かい、薔薇色ばらいろの、そして薫かおりのいい空気が、彼の身边を包んでいた。それが、お役所のボロ机に向つて、コツコツと仕事をしていく時にでも、さては、同じ机の上でアルミの弁当箱から四角い飯を食っている時にでも、四時が来るのを遅しと、役所の門を飛び出して、柳の街路樹の下を、木枯こがらしの様にテクついている時にでも、いつも彼の身边にフワフワと漂っているのであつた。

というのは、山名宗三、この一月ばかり前に新妻を迎えたので、

しかも、それが彼の恋女房であつたので。

さてある日のこと、例の四時を合図に、まるで授業の済んだ小
学生のように帰り急ぎをして、課長の村山むらやまが、まだ机の上をゴテ
ゴテ取片づけているのを尻目しりめにかけて、役所を駈け出すと、彼は
真一文字に自宅へと急ぐのであつた。

赤い手絡てがらのお花はなは、例の茶の間の長火鉢ながひばちに凭もたれて、チャンと
用意の出来たお膳の前に、クツクツ笑いながら（何てお花はよく
笑う女だ）ポツツリと坐うさぎっていることであろう。玄関の格子が開
いたら、兎うさぎの様に飛び出す用意をしながら、今か今かと俺の帰り
を待っていることであろう。テへへ、何てまあ可愛い奴だろう。

そんな風にはつきり考えた訳ではないが、山名宗三の道々の心持

を凶解すると、まあこういったものであった。

「今日は一つ、やつこ奴さん、おどかしてやるかな」

自宅の門前に近づくと、宗三はニヤニヤひとりわら独笑いを浮べなが

ら考えた。そこで、ぬきあしさしあし拔足差足、ソロリソロリと格子戸を開け

て、玄関の障子を開けて、靴を脱ぐのも音のせぬ様に注意しながら、いきなり茶の間の前まで忍び込んだ。

「ここいらで、エヘンと咳ばらいでもするかな。いや待て待て。

やつ独りでいる時にはどんな恰好をしているか、ちよつと一寸すき見を

してやれ」

で、障子の破れから茶の間の中を覗いて見ると、さあ大変、山名宗三、青くなつて硬直した。というのは、そこに、いとも不思

議な光景が演じられていたからで。

二

想像通り、お花はチャンと長火鉢の前に坐っている。布巾ふきんをか
けたお膳も出ている。が、肝かんじん心のお花は決してクツクツ笑って
はいないのだ。それどころか、世にも真面目まじめな様子で、泣いてい
るのではないかと思う程の緊張ぶりで、一枚の写真を持って、接
吻したり、抱きしめたり、それはそれは見ちやいられないのであ
った。

さてはと、山名宗三、ギクリと思い当る所があつたので、もう

胸は早鐘をつく様だ。ソツと二三畳あと帰りをすると、今度はトシドシと畳ざわりも荒々しく、ガラリと間の障子を引開けて、

「オイ、今帰った」

何故出迎えないのだと云わぬばかりに、そこの長火鉢の向う側へドツカリ坐ったことである。

「アラツ」

一声叫ぶやいなや、手に持っていた写真をいきなり帯の間へ隠すと、お花は、赤くなったり、青くなったり、へどもどししながら、でも、やつと気を沈めて、

「まあ、私、ちつとも存じませんで、ご免なさいまし」

そのいやにしとやかな口の利き方からして、食わせものだ。宗

三、そう思った。それに、あの写真を隠した所を見ると、テツキリそうと極った。障子を開けるまでは、若しや自分の写真ではあるまいか、と、一方では大いに自惚うぬぼれてもいたのだが、写真を隠して青くなつた様子では、無論自分のではない。きつと、彼奴きやつの写真に相違ない。あの課長の村山面づらの。

と、宗三が疑念を抱くには、抱いだく丈の理由があつた。

新妻のお花は課長村山の遠縁の者で、長らく彼の家に寄寓していたのを、縁あつて宗三が貰もらひ受たのだ。媒ばい酌しやくはいうまでもなく課長さんである。課長さんといつても、年輩は宗三とさして違わぬ年若だし、奥さんはあつても、評判の不緻ふきりよう縹ようもの、疑い出せば、何が何だか知れたものではないのである。宗三、体ていよく

お下り頂ちようだい戴だいに及んだのか、それも今となつては怪しいものなのである。

それに、もう一つおかしいのは、お花の奴、しげしげと村山家を訪れる一件だ。まだ一月にしかならぬに、宗三が知っている丈だけでも、四五へんは行っている。時には夜に入つて帰つたこともある位だ。

色々と考えるに従つて、もうもう癩しやくで癩しやくで、宗三は胸がはち切れ相そうだ。彼が又大のやきもち焼きと来ているので。が、まずさあらぬ体で夕食を済ませると、いつものように常談口を利き合うでもなく、そうかといつて、写真の正体を極きわめぬ間は、書齋こもにとじ籠こもる訳にも行かず、双方妙に気拙きますく睨にらみ合いといった形。

「それは一体誰の写真だ」

と度々咽喉まで込み上げて来るのを、やつと噛み殺して、宗三
はじつとお花の挙動を監視している。やきもち焼き丈になかなか
陰険な方で、彼の積りでは、床へつく時には、きつとあの写真を
何処かへしまっただろう。それを見極めて置いてあとから探し出し
てやろうという気だ。

三

やがて、お花はだんまりで立上ると、こそこそと、どこかへ出
て行つた。はばかりとは方角が違う。どうやら納戸なんどらしい。宗三

自身は見る影もない腰弁だけれど、家丈おやじは、親父ごげにんが御家人たんすだった
 ので、古いが手広な納戸なんていうものもある。じゃあたんす箆筒へ
 でもしまう積りかな、箆筒といつても、幾つもあるから後になつ
 ては分らない。兎も角、お花の跡をつけて見るにし如くはない。で、
 宗三、そつと立上ると、女房のあとから、影の様について行つた。

案の定納戸だ。今這入つたばかりのところで、まだ箆筒の錠前
 をガチャガチャ云わせている。一体、どの箆筒の、どの抽出へし
 まうのかと、幸の障子の破れに目を当てて、そつと覗いて見ると、
 何しろ二間兼用の五燭の電燈だから、それに障子の穴がやつと片
 目丈の大ききなので、見当をつけるのが、なかなか骨だつたが、
 でも、兎も角、入口から云つて正面の箆筒の上の、小抽斗こひきだしの左

の端ということ丈は分つた。お花の後姿は、そこへ一物を投げ込むと、ビシヤンとしめて大急ぎでこちらへやつて来そうな様子。

見られては一大事と、宗三、元の茶の間へ逃げ帰ると、敷島しきしまを一本、つけるが早いか口へ持つて行つて、スパリスパリとすました。

それから、御兩人睨み合いよろしくあつて、だが、そうしていても際限がないので、どちらが口を切るともなく、砂をかむ様な世間話を二口三口取交している内に、やがて九時だ、宗三思惑おもわくがあるものでいつもよりも少し早いのだが、早速床につく。さつそく

さて、その真夜中、お花の寢息を伺つて、これなら大丈夫と思つたか、宗三むっくり起上つて、寢巻ねまきの前をかき合せると、ソ口

リソロリと寝間の外へ忍び出した。行先は云うまでもなく納戸だ。やつとたどりついて、宵よいに見当をつけて置いた、正面の箆笥の上の一番左の小抽斗、胸をドキドキさせながら開いて見ると、あった、あった、邪推ではなかった。十数枚の大きいや小さいのや、写真の重ねてある一番上に、課長の村山の半身像が、いやにすましてのつかっている、でも念の為に、震える手先に力を入れてその写真を一枚一枚調べて見たが、男のものといつては村山のただ一枚で、あとはみんなお花の家庭の写真ばかりだ。もうもう疑う余地はない。そうと極った。うぬ、どうしてくれるか。くやしいのと、寒いので、宗三ガタガタと身を震わせて、はぎしりをかんだ。

四

その翌日、物も云わず、お花の差出す弁当箱をひつたくると、宗三、やけに急いで役所へ出勤したが、同僚の顔を見ても、癩で仕様がな。はした月給を貰つて、あの課長面にペコついているかと思うと、どいつもこいつも、かたつ端から、なぐり倒してやり度い様な気がする。挨拶もしないで席につくと、ムーツと黙り込んだまま、いやに血走つた目で、まだ出勤しない課長の机を睨みつけた。

やがて、意気な背広の課長さんが、大きな折おりかばん鞆ばんを小脇に御

出勤だ。一同自席から敬礼するのを軽く受けて席につく。鞆がバタンと机の上で鳴る。宗三は、無論礼なんかしない。焼く様な眼で睨んでいるばかりだ。

村山課長、一わたり机の上の整理が済むと、エヘンと一いちが咳がいして、拍子の悪い、

「山名君。一寸ちよつと」

という仰おおせだ。宗三はよつぽど返事をしないでいようかと思つたが、まさかそうもならず、渋しぶ々しぶ席しきを立て、課長の机の前まで行つた。尤ももつと「何か御用で」なんて追つい従しやうは云わない。ムツツリとしてつたつてゐる。だが、課長の方では、何も知らないものだからいつもの通りお叱こい言ごんが始まる。

「君、この統計は困るね。肝心の平均率が出ていないじゃないか。エ、君」

見ると成程なるほど、こちらの手落ちだ。平生なら一言いちごんもなく引下る所だが、今日はそうは行かない。虫の居所が違う。返事もしないで、グツと相手を睨みつけている。

「君はこの統計を何だと思っているのだ。ご丁寧に総計を並べたりして、そんなものは入らないのだ。平均率が必要なんだ。その位のこと解り相なものだね」

「そうですかッ」

宗三、いきなりびっくりする様な大声で呶鳴どなると、サツと書類を引ったくって、そのまま自席へ戻って来た。これから、みっし

り、閑つぶしの御説法を始めつもりの課長さん、目をぱちくり。

さて、自席に戻ると、宗三何だか一生懸命書き出した。殊勝にも統計を訂正するのかと見ると決してそうでない。白紙一枚拵げると、筆太に先ず書いたのが、「辞職願」

五

面喰った課長の前に、小学生のお清書せいしよの様な大文字の辞表を投げつけて、ぐっと溜りゆういん飲いんを下げた宗三は、まだ午前十一時と
いうに、大手を振って帰って来た。

「お花、一寸ここへお出いで」

例の長火鉢の前へ、ドツカリと坐ると、さてこれから一談判だ。昨夜のことがあるのでお花はもうビクビクもの。

「アラ、お帰りなさいまし。どっかお加減でも……」

「いや、身体は別状ない。僕は今日から役所を止す。その積りでいてくれ。それから、役所を止した訳はあの村山と衝突したからだ。だから、今日以後、村山家へ出入りすることはふつつり止めて貰い度い。これは断じて守ってくれないと困る」

「マア……」

といったが二の句がつけない。

「ア、それから」と何気なく、「お前は村山の写真を持っている筈はずだね。あれを一寸ここへ持ってお出で」

夫の劍幕けんまくがひどいので拒む訳にも行かぬ。お花は渋々例の写真を持って来る。宗三は、それを、お花の目の前で、さも憎々しく、ズタズタに引きさくと、火鉢の中へくべて了つた。そして、やつとこれで清々せいせいとしたという顔付だ。

こうまでされては、お花とて悟らない訳には行かぬ。さてはあの一件だなど、どうやら様子が分つた。そこで、兎も角も夫の口からそれを聞いた上のことと、こうなると女てくだというものは手管のあるもので、すねて見たり、泣いて見たり、種々様々の手段つくを尽して、結局隙見すきみの一件を白状させて了つた。

どうだ、これには一言もあるまい。写真をしまつた所まで調べ上げてあるのだから、何といつてもこつちに手てぬか抜きはない筈だ。

宗三、勝利者の気組みで、ぐつと落着いて、お花の様子を眺めている。

するとお花、いきなりワツと泣き伏しでもするかと思いきや、どうしてどうして、宗三があっけに取られた事には矢庭やにわにクツクツと笑い出したのである。

「マア、何かと思えば、あなた、あんまりですわ。村山さんと私と……ホホホ……あなたも随分邪推深い方ね。あの写真、あれは、あれは、あのう、あなたのお写真でしたのよ」

といったかと思うと、お花、いきなり赧あかくなつて、顔を隠すのであつた。

「僕の写真だつて、馬鹿な、うまくごまかそうと思つても、それ

は駄目だ。チャンと納戸へ尾行して、しまう所を睨んで置いたんだからな。あの抽斗ひきだしには村山の写真の外には、僕の写真是おろか、男の一枚もありやしないじゃないか」

「ですから、猶なほ変ですわ。そんな沢山写真があつたなんて。きつとあなたは寝惚ねぼけていらつしたのよ。あなたのお写真是一枚丈け、大切に抽斗の中の手文庫にしまつてあるのですもの。一体あなたの御覧なすつたという抽斗はどれですの」

「あの正面の筆筒の、上の左の端の小抽斗さ」

「アラ、正面ですつて、まあおかしい。私が昨夜あなたのお写真をしまったのは左側の筆筒でしたのよ。抽斗は上の左の端ですけど、まるで筆筒が違いますわ」

「そんな筈はない。やっぱりお前はごまかそうと思っているのだ。僕は小さな障子の穴から覗いたのだから、左側の箆筒など、第一見える道理がないのだ。何といつても正面だ。いくらいそいでいたとはいえ、正面と左側と、まるで方向の違うものを、間違える筈はない」

「おかしいですわねえ」

「おかしくはない。お前はてれ隠しに、そんな出鱈目でたらめを云っているのだ。つまらない真似はいい加減に止さないか」

「だって……」

「だってじゃない。何といつても僕の目に間違いはない」

妙な押問答おしもんどうになって来た。夫は部屋の正面の壁に沿って置か

れた箆笥だといひ、妻は左側面の壁に沿つて置かれたそれだと主張する。両人の言い分の間には九十度の差異がある。

六

「ア、分りましたわ」

突然お花が叫んだ。

「あなた、まあこちらへ来てござんなさいまし。分りました、分りました」

無暗に袖を引っぱるので、宗三仕様事しやうごことなしについて行くと、それは納戸だ。

「これ、これ、あなた、これに違いありませんわ」

そこで、お花がそういつて、指さしたのは、一個の新しい洋服箆笥。去年の暮、臨時手当に据置貯金の利息を足して買い整えた新式洋服箆笥。それが一体どうしたというのであろう。

「お分りになりました。ホラ、この扉についている鏡ですよ。この扉が開いていて、丁度障子の穴の前に来ていたのですよ。ですから、正面の箆笥が隠れて、飛んでもない左側の箆笥が写って、それが丁度正面にある様に見えたのですよ」

成程、洋服箆笥の扉の鏡が、障子の穴の前に四十五度の角度で開いていたとすれば、そこへ映った左側のものが真正面に見えた筈だ。二つの箆笥の形もよく似ているので間違うのは無理ではな

い。殊に薄暗い電燈の光で、しかも大いそぎで見たのだもの。こいつは俺のしくじりかな。宗三あまりの事につかりした。

他人の写真だと早合点したのは飛んだ間違いで、お花が宗三恋しさの余り、彼宗三の写真に接吻したり抱きしめたりしていたのだとすると、こんなひどい間違いはない。ゾクゾクと嬉しがっているべき場合に、見当違いの癩癩かんしゃくを立てて、取り返しのかかぬ辞表まで書いたとは。

さあそこで、主客顛倒しゅかくてんとうである。一挙にして頽勢たいせいを挽回したお花は、今度こそ本当に泣き出した。

お役所を止して明日から何とする積りだ。この不景気に直様すぐさま口があるではなし、そうかといって、遊んで食える身分でもなし、

あなたもあんまり向う見ずだ。それに、私が村山家へ出入りするといつてお怒りなさるけれど、これもみんなあなたに出世させ度いばつかりじゃありませんか。誰があんな家うち、進んで行き度いことがあるものですか。ひとの気も知らないで。といつて恨むうら。怨えんじる。歎なげく。それはそれは。

山名宗三、今は一言もない。そればかりか、さしずめこれから身のふり方に困こまじ果てた。「すまじきものは嫉妬あやまだなあ」彼はつくづく嘆じたことである。

だが、読者諸君。男というものは、少々陰険に見えても、性根はあくまでお人好しに出来ているものだ。そして、女というものは、表面何も知らないねんねえの様であつても、心の底には生れ

つき陰険が巢喰っているものだ。このお花だつて、お話の表面に現れた丈けの女だかどうだか、はなは甚だ疑わしいものである。若しも、例の鏡のトリツクが、彼女の創作であつたとしたらどうだ。そして、彼女が接吻し、抱きしめたのは、やっぱり村山課長の写真であつたとしたらどうだ。

それは兎も角男である山名宗三には、そこまで邪推をたくましくする陰険さはなかつたのである。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第1巻 屋根裏の散歩者」光文社文庫、
光文社

2004（平成16）年7月20日初版1刷発行

2012（平成24）年8月15日7刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第十巻」平凡社

1931（昭和6）年9月

初出：「映画と探偵」映画と探偵社

1925（大正14）年12月

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：門田裕志

校正：A.K.

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

接吻

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>